

は、正に印度の感情とギリシアの美との調和した結合に存するのである。余は、中央アジアの山があり砂の多い道に沿うて、支那、日本までも、此の凱歌を奏した傳播の跡を辿りたいのであるが、之は他事に入る事と思ふ。確かに、其の長い行程の間には、其調子其の衣服に、幾許かの變化は認めざるを得ないと思ふので、殊に、顔面の橢圓形は次第に丸味を帯び、僧衣の襞は益約束に従ふ様になつてゐるのを見る。然しながら全體の面影は、何等變りはなく、其の標本にして、猶ほ、ギリシア風の鈎合や襞の跡を止めないものはないので、時には、其の類似の驚くべきものもある。例へば、優填 Udayana 王の説話に歸せられてゐる佛像の支那での寫が、今日、京都清凉寺の壯麗な佛龕に藏められてゐるのを見れば、常時、信者の眼を遮つてゐる金欄の張が開かれるにつれて、印度ギリシア風佛像が、様式化してはゐるが、疑ふべからざる傳流を眼前に披瀝して迫り來るのである。